東座芸能保存会（白川町）

農山村

文化

取組の背景

白川町内の旧黒川村には、東黒川に「東座」、中黒川に「春日座」、西黒川に「共進座」と３つもの芝居小屋があり、地（素人）歌舞伎が非常に盛んに行われていた。

東座は、明治 22 年、舞台のみが建設され、観客は野外で見ていたが、明治 33 年に客席も建設され現在の姿となった。

それ以来、住民による地歌舞伎や劇団の来訪など、地元住民の娯楽の殿堂として機能していたが、昭和 30 年代に入り、映画やテレビの放映により、東座の使用は減少した。同時に、他の芝居小屋も閉鎖に追い込まれ、建物の老朽化もあり、徐々に取り壊され、加茂郡で現存する芝居小屋は東座のみ（県内では７棟）となった。

東座も建物の老朽化が進み、昭和 40 年代には使用禁止となり、取り壊しなどの危機があったが、住民の財産として結論が出ず、朽ちるままに放置されていた。

昭和 60 年になり、地域の伝統とアイデンティティを見直す雰囲気が高まり、東座の保存運動が起こった。保存会の設立や住民の粘り強い活動が実を結び、平成２年から東座の修復工事が始まり、平成３年４月、中村勘九郎を招き、修復記念公演が行われるなど、折からの地歌舞伎ブームにも乗り、住民の熱意が地域の伝統を守り継承した形となっている。

※中村勘九郎（現勘三郎）氏は、これが縁で東座の名誉館長に就任している。

取組の概要

東座伝統芸能保存会は、昭和 60 年、白川町黒川の芝居小屋である「東座」（定員 500 人）の保存運動を進めるため、地元住民により結成され、東座の建物と歌舞伎の伝統の保存及び運営を行っている。

保存会には地元住民が、年間の行事等について役員会で決める。町から運営費の補助はなく、運営費は歌舞伎の出演料や東座の使用料等でまかなっている。運営は厳しいが、歌舞伎にかける情熱と長い歴史のある地歌舞伎と芝居小屋を後世に伝えるという使命感が活動を支えていると言える。

取組の内容

保存会では、東座での公演（行事）、管理、運営をはじめ、歌舞伎の指導を行っている。

ほとんどがボランティアであり、東座と歌舞伎を愛する熱意で支えられている。

※行事（ふれあい公演）

年１回、４月の最終日曜日に開催している。また、秋の黒川中学校の文化祭も、ここ３年前から東座で行われ、１年生は黒川の箱岩太鼓、２年生は歌舞伎、３年生は三味線を発表会としてやられ、父兄は元より地域住民に大変喜ばれ、非常に好評を博している。

ふれあい公演は、毎年２月から稽古をはじめ、５月の本番を迎える。そのための演技指導、舞台・小道具づくりをはじめ、広報、資金集め、当日の手配など多くのボランティアの協力を得て公演を成功させる。

舞台や小道具は、絵画を趣味とする人たちがボランティアで書き割りを作成するなど、多くの人の協力が不可欠となっている。

東座の管理運営として、運営資金の調達も重要な仕事である。運営費の補助はどこからもないことから、ふれあい公演の出演料、他劇団の公演（入場料）はもちろん、趣味サークルの活動発表、老人会の総会、各種会議などに貸し出すことにより維持管理費を捻出している。

こうした地道な活動が実を結び、平成 18 年、白川町合併 50 周年記念として中村勘三郎襲名披露公演を執り行うこととなった。

成果

・県内で７か所の芝居小屋を保存し、住民による地歌舞伎公演を毎年開催していることにより、全国に東座ひいては白川町黒川の名を知らしめ、全国から多くの地歌舞伎ファンを集めている。

・歌舞伎公演へ子どもたちを参加させることに

より、昔から地域に根付く伝統芸能の継承とその「場」である東座を象徴とするふるさとの財産を守るという意識付けに成功した。

・また、親をはじめとする大人たちの理解を得ることができ、地域を挙げての活動につなげることができた。

東座　芝居小屋

成果の要因

東座の老朽化により、東座自身は使用禁止となったが、地歌舞伎自体は場所を変えて住民の手により続けられてきた。そうした取組が東座の修復へと向かわせ、地元住民や町当局の理解を得るに至った。

※東座の修復には 4,200 万円の経費が必要となったが、白川町がふるさと創生資金を活用し 2,500 万円を補助（芸能の里として周景整備）。残りの 1,700 万円を地元住民等による寄付でまかなった。

※1,700 万円の負担はすんなり決まった訳ではなく、何回も会議を開き、現保存会の役員による説得と住民の地元の財産を愛する心により決せられた。特に、黒川には３つの芝居小屋があったことから東以外の中、西地区の住民には東座への拠出に反対する意見が多かった。

昭和後半には､新しいものだけを求めるのではなく､地域の資源､伝統を見つめ直すふるさと再発見ブームがあった(ふるさと創生資金もその一環)。そうした時代の雰囲気もあり、地元に唯一残る財産として東座の価値が見直されたと思われる。

同時期に、地歌舞伎ブームを起き、他地域でも一度途絶えていた地歌舞伎を復活させる(近隣では白川町佐見、東白川村）など、地歌舞伎を通じた交流や連携も生まれた。

今後の課題

・保存会員の高齢化による後継者難
地歌舞伎への出演者は毎年あり（40 人程度)、子どもたちの参加も得られることから、地歌舞伎の伝承は可能であるが、それらを支える裏方が不足している。運営はもちろん、歌舞伎の指導ができる人がいなくなっており、そういう面での継承が危ぶまれている。

・運営費の確保
建物の修繕費や運営費の確保に苦労している。住民や企業の寄付も困難になりつつあり、運営費の確保が大きな課題となっている。

この人にお話をうかがいました！

東座芸能保存会
東座運営委員長　三戸 宇吉 さん
東座歌舞伎指導委員長　古田 時夫 さん

調査日：平成１８年１０月２７日（金）
調査者：中濃振興局 山田